

**研修テーマ：訪問看護師の地域ケア・他機関との連携・チームの自主運営について学ぶ**

**オランダ：Buurtzorg（ビュートゾルフ） - 2**

訪問看護の現場研修として、実際に看護師とともに自宅を訪問してシャワーや清拭などの清潔ケアや、薬の管理、診察やリハビリテーションの進捗などを確認したり、本人や家族とのざっくばらんな話から次のケアプランへの反映について、看護師同士がディスカッションする様子、看護師が自らのプランに基づいてケアに必要な医療材料を調達したり、医師や他のチームとの連絡を行ったりする様子を研修した。オランダでは安楽死が認められているため、安楽死について言及するクライアントもあり、身体的ケアだけでなく、精神的なケアについてもチームでサポートを行っている。

※クライアント（患者）の自宅を訪ねたため、写真撮影はなし。

**【福祉機関：子どもホスピス】**

Kinderhospice Binnenveld は、オランダ中部にある大きな農家の建物を改装して作られた、障害児や医療的ケア児とその家族のためのレスパイト施設である。1階はキッチンや食堂、作業療法室、家庭的に過ごせるディールームと事務室、2階に宿泊用の12の個室と2つの特殊浴室が用意されている。地階には倉庫や機械管理室、洗濯室の他、子どもや家族のためのリラクゼーション・ルームも整備されている。

夜間も2人以上の看護師が常駐し、医療面での見守りやケアを行っている。多い日には12の個室が満室になり、さらにスタッフを追加することもある。

多くのボランティアスタッフや学生インターンも関わっており、日本の子どもホスピスとも交流がある。

施設の全体：いちばん大きな建物が子どもたちのための部屋として使われている。

同じ茶色の小さな建物は事務室やスタッフの瞑想等のための部屋が入っている。





「家庭的な雰囲気でありたい」という理念から、ディールームと同じ空間に大きなキッチンとダイニングが備えられている。

ディールームにあるソファも、ダイニングテーブルも家庭に置かれるのとおなじように、大人サイズのもので採用されている。「たとえ経口で食事を食べることが難しいこどもであっても、料理の匂いや食事の雰囲気を十分に味わえるようにしたい」とディレクターの Stoelinga さん。

ディールームからすぐに庭に出られる。  
安全に散歩できる小径も整備されている。



宿泊用の個室：ナースコールはもちろん、各児にあった医療機器や身体補助器具などを保管したり置いたりするスペースを充分に取ってある。小さなこどもであればこの個室で沐浴をしてもらうことも可能。





職員やボランティア用の静かな部屋。  
ディールームや宿泊室がある建物とは別にあり、  
瞑想や振り返りなどに使うことができる空間。  
窓からは美しい田園風景がのぞめる。



気管切開や胃ろうなどの医療的ケアが必要な子どもたちも  
多く利用するため、個別の医療機器やカテーテル、消毒剤  
などを備えたワゴン。こどもの名前や写真が貼られており、  
ゴミ箱もいっしょにワゴンに載せてあるので、この1台をそれ  
ぞれのこどもの側に運んでいくだけで、施設内外のどこでも  
速やかな対応がしやすい。

気管内カニューレを付けた職員練習用の人形。  
カニューレの固定や一時的再挿入の練習に使う。  
赤ちゃん人形の他に児童人形もある。こうした  
研修用の機材も地下倉庫に多数保管されている。





12の居室の全てを見渡せるナースステーション。夜間は必ず1人以上の看護師がここに待機し、交代要員の看護師も泊まり込む。



ディレクターの Stoelinga さんと懇談。将来は宿泊だけでなく、近隣の障害児たちがもっと気軽に来れるようにディケアを作りたい、と次の計画についてもお話を伺った。



### 【教育機関：障害児と健常児の統合教育に取り組んでいる中高一貫校】

オランダでは小学校を終えると、職業訓練的な学校か、大学等に進学する学校かを選んで中高一貫校に進学する。オランダ政府は最近になって、障害児を特別支援学校だけでなく、普通学校でも障害児を含んだ統合教育を行う方針を打ち出した。見学した学校では、15年前から統合教育に取り組んでおり、1000人の生徒に加えて、120人の身体障害児のためのスペースを用意し、現在は65人が就学している。

建物は普通教室が並ぶA棟と食堂等が入るB棟、障害児がより快適に過ごせる教室やスペースを用意したC棟が全て連なった状態で建築されている。また、隣地には若年の障害者が入居できるアパートがあり、遠方から通うのが難しい生徒が寮として滞在できるように連携を行っている。

車椅子などでも容易にデスクや実験装置にアクセスできるように配慮されたC棟の理科室





A 棟と C 棟を食堂などがある B 棟がつないでいる。障がいのある生徒は C 棟での専門教室だけでなく、A 棟で普通学級での授業も受けることができる。どの授業を A 棟で受けることにするのかは、授業のアレンジを手伝ってくれる専門職員と本人が話し合っで決める。

C 棟には、聴覚過敏の生徒が 1 人でも課題に取り組めるように部屋を 1 人で使えるようにしていたり、自習的な時間にもいつでも手助けできるように教員が 2 人以上待機しているスペースも設けられている。障害をもつ生徒は、この学校に通常就学期間の 2 倍の期間にわたって就学でき、自分のペースを保ちつつ卒業でき、健常者が大半を占める社会に出て行く準備を整えることができる。

統合教育を行っている中高一貫校はオランダ全国でも数少ないため、2 時間以上を掛けて通ってくる生徒もいる。そのため、体調や送迎の都合で、生徒が遠隔ビデオシステムを使えるようにしている。装置は生徒が自分でカメラの方向を遠隔操作でき、授業での発言や友だちとのおしゃべりもできる。

障害を持つ生徒は、学科ばかりでなく多くの時間を「自分とは何か」を探ることを奨められる。メンターを付け、自身の障害や自分のやりたいことについて理解や洞察を深め、人生をどのように歩んでいきたいのかを自己決定する力を育むことを教員チームでは最も重要なことと考えている。





## 校舎と前庭



生徒寮としても利用できる隣地にある若年者向けアパートメントの共用キッチン。現在は精神的な課題を持った成人が多く入居しているが、夕方には各階のキッチンに職員がおり、8人のグループ毎に一緒に料理をしたり話を聞いたりしながら、各児の自立への援助を行う。キッチンは車椅子対応のものと、通常のものが用意されている。各個室には専用のトイレと浴室設備があるほか、24時間体制で1-2人の職員が24人の利用者のために待機する。

